

Trial #143 after

Side Mejiro Dober
Vol.1

あなたがいらない世界で、一步、踏み出して

麦（穀物P）

目次

序章	出会った彼女はG I五冠ウマ娘	4
第一章	すべてが消えた絶望、慟哭、終わり、そして、	20
第二章	追憶、そして新たな道へ	54
第三章	一步、踏み出して	74
間章・一	遠い世界を見つめる友達	100

序章 出会った彼女はGー五冠ウマ娘

(Side: アクアマリンエール)

新年度、大学の入学式の日を迎え、会場最寄り駅で降りた大勢の同年代の子達と一緒に、着慣れないスーツを着て入学式の会場に向かっていた。

私が行く大学は超巨大で、毎年学内ではなく近隣のイベントホールを使って新入学生を迎えている。ホール前の広場を埋め尽くすように広がる人の流れの中には、私と同じウマ娘の姿もそこそこ見えた。

私はウマ娘ではあるけれど、小学生時代の体力測定結果からはいたって普通の存在とのスコアが出ていた。ヒトの子よりちょっぴり体力があるくらい。ダメ元で一応詳しく検査

を受けてみたけど、トウインクル・シリーズで活躍するどころか、トレセン学園への入学に必要だと噂されている身体能力基準にも遠く及ばないだろうとの結果が出たのを今でも覚えている。

実際のところ、トレセン学園の入学試験は入学後に開花する才能も見込んで合格を決めているので、体力テスト等で一律に決まるわけではないと聞いていた。でも、体力だけでなく、学力やダンスなどの他の分野の試験も難しかったので早々に諦めた。

小学校から中学校、そして高校へと一般的な道を進み、さらに自分が興味を持った分野で大学を受け、なんとか合格することができた。家から通える範囲なのでしばらくは通って、状況を見て二年目から一人暮らしをしようか——などと考えつつ歩いていると、目の前にちよつとオロオロしている新入生らしき子がいた。彼女も私と同じウマ娘だった。

「どうしました？」

「えっ!? あ、えと、なんか、どの入口がわからなくて……」

声を掛けた瞬間、彼女がこちらを振り向いた。目を潤ませた半泣きの状態で、よほどパニックになっていたのだろう。顔立ちがとても美しく、半泣きの表情ですら、絵に描いたら立派な作品になること請け合いだった。どこかで見覚えがあるような気がしたが、い

まいちよく思い出せないのでひとまず後回し。

今日の入学式は巨大な会場に新入学生をたくさん集めるため、学部ごとに入場ゲートが分けられていた。普段ライブなどでこのホールに来ることがなければ、道に迷っても無理はない。

「入場ゲートの案内は何と書いてありました？」

「えっと、三番ゲートです」

「じゃあ私と同じですね！ ひょっとして教育学部だったりします？」

「はい」

「私もなんです！ せっかくなので一緒にいいですか？ あつ、怪しい勧誘とかじゃありませんから！」

「その……ありがとうございます。よろしく願います」

半ば勢いでその子の手を取り、少し引つ張るような感じでゲートに向かった。

二人揃って受付をして、指定されたエリアの席に座った。教育学部には階段状になっている席が割り当てられていて、ステージがよく見えた。今日は好きな俳優さんではなくて

学長さんとかえらい人が立つだけなので、見えても見えなくても関係ないかもしれない。できるならばこの席の引きの良さは舞台やライブで発揮されてほしい。

一息ついたところで、まだ自己紹介をしていなかったことを思い出した。

「そうだ、まだ名乗ってなかった！ 改めまして。野口沙織のぐちさおりっていいです。ウマ名は一応、アクアマリンエールつてついています。表で使うことはありませんでしたけど」

「アクアマリンエール、ですか。とてもいい名前ですね」

「ありがとうございます！ そう言ってくれると超嬉しいです！ お姉さんのお名前は？」

そう水を向けると彼女は小さい声で名乗った。

「——です。それで、ウマ名は……——」

「え？」

後半が特に聞き取れなかったので耳に手を当てて尋ね返すと、しばらく沈黙があつて、先ほどより少し大きめの声で返事をしてくれた。

「その、あの……メジロ、ドーベル、です」

「メジロドーベルさんですね——え、メジロ？ ドーベル？ あの、昨年のエリ女じょで優勝

してた??」

「あ、はい。そのメジロドーベルです……」

立ち上がってちよつと離れて彼女をよく見た。その姿は、言われてみれば確かにテレビやトゥインクル・シリーズ特集の動画チャンネルで何度も見たことがあった。耳飾りはテレビで見えていたのとは違うけど、控えめに入った色はまさしくメジロの――。

「しししししし失礼しました!!!!!!」

「こ、声、大きい!」

上半身を下げる角度が九十度を通り越して百五十度を記録した、と思う。お嬢様相手に初対面から馴れ馴れしくした罪でメジロの家から招待状死刑宣告書が届いた時のために、入学式の後スライディング土下座の練習をしないといけないかもしれない。

そうこうしているうちに式が始まり、放心したままアナウンスに合わせて立って礼をしたり座ったりしていたらいつの間にか終わっていたらしい。メジロドーベルさんから遠慮がちに肩をトントンと叩かれた。

「式典、おわったよ。学部ごとの会場に移動するみたい」

「……ハッ! ごめん! メジロ家へのお詫わびとして何を包んだらいいか考えてた。やつ

ぱり一個五万円くらいする菓子折り？」

「えー、つと……」

私の言葉に彼女は苦笑いを浮かべた。その表情を見ているうちに落ち着きを取り戻して、自分が妙なことを口走っていたことに気づいて反省した。

「ごめん。ちょっと混乱してたかも。行こっか」

「うん」

電車で大学のキャンパスに移動してから学部ごとの入学説明会の会場へ。メジロドーベルさんがここに入学したことは朝からここまでの間に知れ渡ったらしく、まわりに結構な人垣ができていた。

「この人の山、やつぱりみんなメジロドーベルさんを見に来たのかな」

「たぶん」

「やつぱり——って、えっあれなに!? なんかあつちにサングラス掛けた怖そうな男の人やウマ娘の人が立ってるんだけど!？」

「あれは……あー、東京本邸ほんていのSPかも。おばあ様が手配したんだと思う」

「すごい、本物のお嬢様だ！」

「本邸はあんな感じだけどアタシの家はそんな……」

「ま、いろいろ大変そうだし、SPさん達がうまく守ってくれてるならその方が私も助かるか」

「ありがとう……」

大講義室に入ると、視線がこちらに集まってきたような気がした。SNSでも話は流れているに違いなかった。ただ、みんな超有名な名人相手に気が引けているのか、さすがにこちらに寄ってくる人はおらず、後から来る人もやや避けるように座っていた。

入学ガイダンスの時に来た学部長の先生は特にメジロドーベルさんの存在を意識したふうもなく、淡々と説明をしてつつがなく会は終了した。

「ねえメジロドーベルさん」

「フルネームじゃなくていいよ」

「じゃあベルちゃん」

そのニックネームを口にした途端、メジロドーベルさんの顔がこわばり、耳がしおれるように倒れ、尻尾も垂れ下がった。何やら彼女にとっての特大の地雷を踏み抜いたのは明

らかだった。どう取り繕^{つくろ}おうかと私が口をパクパク開けたり閉じたりしていると、メジロドーベルさんが泣きそうな顔で無理やり笑みを浮かべ、か細い声でつぶやいた。

「ごめん……ちよつとある人のことを思い出しちゃって」

「こちらこそごめん……」

「うん……だから『ベルちゃん』以外でお願い。ちゃんじゃなければさんでもくんでもいい」

「ベル君、つて言うとなんか大学の教授が呼ぶやつっぽくない？」

「たしかに」

メジロドーベルさんのおかげでなんとか場が立て直された。申し訳なさを覚えつつニックネームを考えたら、いくつか思い浮かんだ。

「ニックネームねえ……うーんと……ベルさん、ベル君、ベルっち、ベル姉貴、ベル先生、ドーちゃん、ドー師匠、どぼめじろう」

「最後の何!？」

「A I にニックネームを提案してもらったら『英語に翻訳して、それを日本語に再翻訳してみました』ってやつで出てきた」

「なんだ……でも他のがいい……」

「わかる」

いろいろ考えた後、ひとまず何の変哲へんてつもない『ドーベルちゃん』で落ち着いた。とはいえやはり可愛い子はより一層可愛いニックネームで呼びたいから、これからも良い名前を考えていきたい。

「じゃあ、沙織さんのことはなんて呼んだらいい？ ウマ名から取ってもいい？」

「いいよ、全然呼ばれ慣れてないから気づかないかもだけど」

「ふふっ……そうね、アクアってどう？」

「誰？」

「あなたのことだけど……」

友人どころか家族でさえもウマ名やそちらからついたニックネームで呼ばないので、きちんと構えていたのに自分が呼ばれたと反応できなかった。

「そのニックネームで呼ばれても四年間くらい気づかなさそう」

「四年も経っちゃったらあたし達もう卒業しちゃってない？」

「そだね。もつと早く気づけるよう頑張る！」

「頑張るところ？」

大講義室の外に出て、改めてメジロドーベルさん——ドーベルちゃんと向かい合って挨拶をした。

「メジロドーベルさ——じゃなかった、ドーベルちゃん、これからよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします。アクアさん」

「アクアでいいよ」

「じゃあアクア」

「うん。よし覚えた。私のニックネームはアクア」

「そこ意識して覚えるところ？」

「きちんと覚えないとドーベルちゃんから呼ばれても気づけないから」

「なんかニックネームの意味がないような……」

「いいのいいの、なんだかんだでウマ名呼んでもらえるのは嬉しいから。特に超すごいG I ウマ娘さんに呼ばれると格別だね！」

「そうなんだ。ふふっ」

こうしてドーベルちゃんと友達になった。友達、ってことでもいいのかな？　そういうことにしよう。結構強引に行っちゃったけど、大学での友達第一号ってことで。

キャンパス内のメインストリートみたいところに出ると、新入生とサークル勧誘の先輩達で埋めつくされていた。歩いていると自然とその波の中に入り込んでしまった。こちらにチラシを差し出してくる先輩、ドーベルちゃんの姿に気づいてビビって引つ込めかける先輩、目をハートにして崩れ落ちる先輩など様々だった。引つ込めかけたチラシは私が受け取っておいた。崩れ落ちた先輩はどこからともなく現れたメジロ家のSPさん達に介抱^{ほう}されていた。

「やっぱりサークルっていっぱいあるんだね！　ドーベルちゃんはサークルに入るかどうか決めてる？」

私の問いかけに、ドーベルちゃんは自信無さげに首を振った。

「ううん。ちよつとどうしようか迷ってる。昔よりはだいぶマシにはなったけど、相変わらず男の人が苦手なままだし……あと、やっぱり、自分の名前に負けそうというか、『メ

ジロドーベル』って名前を聞いて遠慮しちゃう人ってやっぱり多くて……。さつきもびびってた先輩多かつたし」

「そだねー、確かに超有名人のお嬢様にいきなりアタックしてくる人はなかなかないし、逆に警戒した方がいいと思う。あ、私は人畜無害じんちくむがいだよ？ 取って食べたりしないから！」

「それは分かってる。ありがとう」

「いえいえ」

人込みを抜けてカフェテリアに腰を落ち着けた。二人ともカフェラテを頼み、クッキーセットを添えた。窓越しに多くの人が行き交う様子が見える。

「やっぱり、まだ人込みは苦手」

「レース場とかではどうしてたの？ G Iレースの時とか、ウイニングライブの時とかお

客さんめっちゃ多いよね？」

「最初はとて怖かった。でも、トレーナーとか、あの人が『観客はにんじんと思え』ってアドバイスをくれて、それでだいぶ楽になったんだ」

『あの人』というのは、ドーベルちゃんのことを『ベルちゃん』と呼んでいた人のことに違いなかった。その呼び方だけで心が大きく揺れるのだから、よほど大切な人だったんだろう。

「何回かレースとかライブに出てたら結構慣れたの。落ち着いて見たらね、意外と一人一人って小さいから、うまく視線を外したらにんじんだと思い込まなくても緊張しなくて済むって分かった。それから何回かしたらファンサもできるようになった」

「ファンサ……すごい、やつぱりアイドルだ……」

やはりテレビの向こうに立っていたのは確かにこの子だったらしい。でも、目の前にいるドーベルちゃんからはそうした強さは特に感じられず、まさに普通の女の子だった。

「もうあんなパフォーマンスとか、いろいろな意味でできない気がする。なんであんなにいつぱいの人の前で歌って踊ってたんだろ……？」

「やつぱりレースの後のアドレナリンドバドバってやつ？」

「そうかも」

ドーベルちゃんがクスクスと笑った。その笑顔がとても愛らしくてつい抱き締めたくなった。護^{まも}りたい、この笑顔。

盛り上がっているうちに夕方になっていた。そろそろ帰宅しなければ。家までは電車で一時間くらいかかる。

「ドーベルちゃんは通い？ それとも下宿？」

「一人暮らししてる。ここからちよつと歩いたところの女子学生向けワンルームマンション」

「あー……」

合格発表の時に門の前で配っていたマンション案内のカタログを貰^{もら}って眺めた時に、超高級だったので驚いた覚えがある。ドーベルちゃんくらいのお嬢様だとセキユリティがガツチリしていた方がいいし、何だかとても似合いそう。

「アクアは？」

「私はしばらく実家から通うことにしてる。いずれ一人暮らししようかなって思ってるんだけど、ドーベルちゃんちの近くに早速下宿したくなっちゃったなー」

「あたしのあのマンション、まだ空きがあるみたいだけど」

「いやいやいやいやいや！！！！そこ住んだらうち一か月で破産しちゃうから!？」

ドーベルちゃんがこともなげに超高級マンションを勧めてきたのでぶんぶんと首を横に振った。こうしたところはお嬢様っぽさを感じなくもない。

「そ、そう……」

「うん。その隣とか、ちよつと離れた所のもうちよつとお得なワンルームを狙う予定」

「ご近所さんになれるの楽しみにしてる」

「一年くらいかかりそうだけどね」

笑い合いながら大学を出て、ドーベルちゃんの新居の前で別れ、私は電車の駅に向かった。途中までは帰宅ラッシュと反対向きだけど、都心まで戻ってから家まではラッシュと同じ方向になってしまふ。もちろん朝の通学の時は前半が超ラッシュ。正直明日から混んだ電車に耐えられるか不安だけど、新しい友達が早速できたことだし、頑張ってみようと思った。

第一章　すべてが消えた絶望、慟哭、終わり、そして、

(Side: メンロドーベル)

大学生活が始まって最初の週末、あたしはワンルームマンションで引越し荷物の片付けに追われていた。実家からは最低限の荷物だけ持ってきたつもりだったけど、ちよつと部屋やクローゼットの大きさを見誤っていたかもしれない。初日にできたお友達、アクア——アクアマリンエールさん——がアドバイスをしてくれた通り、収納の裏技を使ったほうがいいかもしれない。

どうにか午前中に箱の中身を全部収めることができ、最後に雑貨入れの段ボール箱を開いて、写真立てを取り出した。その写真は一年前の春に金沢で撮ったもので、あたしと

マックイーンが二人並んで自撮りをした感じのスナップ写真になっていた。二人の間には不自然な空間があつて、本来は何かがそこにあつたことを示していた。それは一人のウマ娘、この世界ではあたしとマックイーンしか知らない、覚えていない、それ以外の人は誰も知らない、あたしの大切な人だった。人生最初で最後のパートナーで、私が生涯を終えるその日までその人以外に横に立つ人はもういない。作らない。

「ゴールドシップ、さん」

初めて会ってから長いこと呼ぶことがなく、別れの間際にたった一回だけ呼んだその名前を口にしてみたけど、呼び捨てにするのは失礼な気がしたし、マックイーンみたいにさん付けしてみてもしつくり来なかった。やはり、あなたは「あなた」だった。

もう、あの日、あの時から半年が経ってしまった。

エリザベス女王杯で再び勝てた日の深夜、日付が変わる直前に永遠の別れのキスをして、その直後から記憶がなかった。気がついた時は病院のベッドの上だった。あたしが目を覚ましたことに気付いた看護師さんがすぐ家族に連絡を取ってくれたらしく、ものの十分ほどで両親とマックイーンが駆けつけた。

「ベルちゃん！」

「ドーベル！ やつと目を覚ましてくれましたわ！」

「お母さん、お父さん、マックイーン……」

「ベルちゃんが倒れているのを発見されてから丸一日経っていた。……無事で良かった」

「ごめんなさい。どうしてもゴールドシップさんと……」

あたしが不意にその名前をつぶやいた時、両親の顔には困惑の表情が浮かんでいた。

マックイーンだけはきちんと反応してくれたけど、その表情はかなり険しかった。

「ベルちゃん、その……ゴールドシップ、さん？ ってあなたのお知り合い？」

「え……？」

お母さんのその反応に絶句するほかなかった。助けを求めるようにマックイーンの方を見ると、マックイーンは弱々しく首を横に振った。その後の展開は薄々予想がついてし

まったけど、その結論を認識するのが怖くて、ちょうど看護師さんが検査のために声を掛けたのをこれ幸いと病室から半ば逃げ出すように出た。

検査は一時間ほどで終わり、病室に戻ってからまた少し両親と話をし、両親が一足先に帰ってマックイーンが残った。

「マックイーン……」

「ドーベルに重大なお知らせをしなくてはなりません」

その次の言葉はもう分かっていた。聞きたくない。それを聞いてしまうと、もう立ち直れないから。

「ゴールドシップさんのことを、誰も覚えていませんでした。覚えているのは、おそらくドーベルと私だけです」

「……うそ、よね……？」

口からこぼれたあたしのその言葉に、マックイーンは沈黙をもつて返し、しばらくして再度弱々しく首を横に振った。

それから面会時間の終わりが来るまでの約三十分、お互いに声を発することができなかった。

その日は消灯時間を過ぎても、全く寝つけなかった。

数日後に退院し、その翌日、久しぶりにトレセン学園に登校した。校門をくぐって一直線にトレーナー室に向かった。

「失礼します」

「ドーベルさん、無事快復かいふくされて何よりです」

「ご心配をおかけしました。もう大丈夫だから」

「まだ本調子ではないと思いますし、そもそもエリザベス女王杯からまだ一週間も経っていませんから、何をするにせよ一服いっぷくすべき時です。ひとまずはゆつくりしましょう」

「うん」

トレーナー室のソファに座り、トレーナーが出してくれたお茶とお菓子を食べる。トレーナーはその向かいで、同じようにお茶をすすっていた。そして、トレーナーの隣だったりあたしの隣だったり、神出鬼没だったあなたはもういなかった。

「トレーナー」

「なんでしようドーベルさん？」

「トレーナーは、ここによく来ていた子のこと覚えてる？」

その問いは、希望がもたらされるか、絶望をより深くするか。きつと後者に違いなかったけど、それでも問わずにはいられなかった。

果たして、残念ながら奇跡は起こらなかった。

「はて……どなたかいらっしゃってましたかね？ 最近は大先輩を中心にお客

さんがたくさん来ていてうつかり誰に会ったか忘れてしまいそうになりますが、生徒さんのことはひとり残らず覚えています」

「そう……あたしの記憶違いだったかな。ちょっと混乱しちゃってるのかも」

諦念ていねんからのつぶやきをもらしたところ、トレーナーから予想とは少し違う言葉が返ってきた。

「ただ、私としても少々気になるところがありました。ドーベルさんのトレーナーになってからの活動日誌で、いろいろと不自然な抜けがあると思えないような事象が起きます」

「それって……」

「ええ。もしかしたら私の記憶から失われたどなたかがいらっしゃる可能性があります。」

少々調べてみようと思います」

「お願い」

少し手掛かりがあるような、ないような状況でトレーナー室を出た時のあたしの足取りは、きつと他の人から見ても重いものだったんじゃないかと思う。ちつとも身体が前に進まなかった。

手掛かり探しを兼ねてカフェテリアにたどり着くと、お昼休み少し前なのにもものすごい混雑になっていた。よく見たらご飯もののレーンに異常なまでに並んでいて、定食のレーンや麺類のレーンはいつものこの時間通りの混み具合だった。

混雑が捌けるまで片隅の椅子に腰掛けて待ち、落ち着いた頃にご飯もののレーンに行つて係のおばさまに挨拶をした。

「お疲れ様です」

「あらドーベルちゃん！ 良かったー！ エリザベス女王杯の日の夜に倒れたって聞いて心配してたのよー！」

「ご心配をお掛けしました」

「しばらくレースは無いんでしょ？ 力をつけてしばらくゆつくりしなさいな。この謎の

スタミナチャーハンで！　ちよつとニンニクきついけど」

「これ……」

これは、きつと。

「これね、誰が思いついたかわかんないの。いつの間にかレシピがファイルに挟み込まれて、なぜかメニューにも載^のつてて、そして学生さんがみんなこれを食べに来るの。もう厨房^{ちゅうぼう}はてんやわんや！　高火力コンロも中華鍋も、あたしら腕^{ぶし}節の強いスタッフも総動員してるんだけどもう大変で！」

「そうなんですね……」

薄々と言わず、もうほとんど分かりきつてはいたけど、やはりそこにも手掛かりは何も無かった。さすがにニンニクの匂いが強いのは控えたかったので、スタミナチャーハンではなく普通の炒飯にした。

それから学園中を歩き回った。あなたとはじめて声を交^かわしたグラウンドの土手、あなたがよく寝ていたにんじん畑の片隅、あなたがひとり寂^{さび}しそうに空を見上げていた校舎の屋上。そのどこにも痕跡^{こんせき}すらなかった。

もう、ダメかもしれない。トレーナー室に戻って鞆かばんを取り、校門へ向かった。もともとあたしは休みの日なので、授業は全く関係なかった。門を出て少し立ち止まり、ふと思いついた。

あの場所に何かないか。

早足が疾走に変わるまではすぐだった。本当ならウマ娘専用レーンでないと出してはいけないスピードで道路を走って、あの場所に来た。

あなたが一人暮らしをしていたアパートの一室。
表には何もない。裏手は。

裏に回り込むと部屋の中はすぐに見えた。
中がすぐに見えてしまったことが答えだった。

家具どころかカーテンすら無かった。

完全な空き部屋だった。

あの最後の夜、ちよつとだけ上がらせてもらった時にまだいろいろあったはずの物が、何ひとつなかった。

誰かが持ち去ったようでもなく。

はじめからそこには何もなかったかのように。

誰も住んでいなかったかのように。

「……はは、あはは、は………はは………何にも、ないじゃん………」

その後、どうやって帰ったかは覚えていない。帰り着いた先は寮じゃなくて自宅、気づけば自分の部屋のベッドに横たわっていた。

「……っ、……っく、うっ………」

涙が止まらなかった。もしタオルが手元にあったら、二枚や三枚くらい全部涙でびちゃ

びちやになってしまっていたかもしれないなかった。制服を着たまま、その日は眠ってしまっていたらしい。無意識に部屋に鍵もかけてしまっていたらしく、家族でさえも誰も入ることができなかつたと後から聞いた。

目が覚めた時、カーテンから垣間見えた空は薄暗く、どんよりとしていた。さながら、あたしの今の心象風景、そして未来を表しているかのようだった。ベッドから起き上がったものの、もう立つ気力もなく、よろけるようにして部屋の片隅に崩れ落ち、膝を抱えてうずくまつた。

「……お願い……夢なら覚めて…………」

かつて自分が語った、あの言葉。

『実際にフラれたらトウインクル・シリーズの選手であることを捨てて引きこもって暮らすと思う。……G I 覇者が引きこもりニートになっちゃうね。ぼさぼさの髪と尻尾、ジャージ姿で部屋の片隅にうずくまって、過去の栄光とあなたとの思い出に溺れる日々』

——
『 ジャージではなく制服で、フラれたのではなく世界の理不尽に引き裂かれて文字通り永遠に会えなくなっただけ、まさにあの時の自分の言葉が呪いの^{のろ}のように今のあたしにのしかかった。

「嫌だ……」

もう、少しも動きたくなかった。

少しまどろみ、目が覚めているあいだはぼんやりと床を見つめることを繰り返して、二日か三日くらい経ったかもしれない日、部屋から少し出てトイレに行ったり水を飲んだりした。鏡は見なかった。歩いている時に傍^{そば}で声がしていた気がしたので、もしかしたらお母さんが近くにいたのかもしれない。いや、きっといたに違いなかったけど、本当の

ところはわからなかった。

またしばらく経った日、机の上にあるペン立てに、あるものを見つけた。いや、本当はずつとうずくまっていたこの片隅からはいつも見えていたはずなのに気付かなかつたもの。とても鋭く、ウマ娘としての瞬間的な力を使うまでもなく立派な凶器にもなるそれ。長い鋏はさみだった。

その日と次の日、あたしの視線はそれを見たまま、少しも動かせなかった。

さらに次の日、目さえも少しかすむようになっていた中、よろけるように立ち上がって机に近付き、ようやくそれをゆつくりと手に取った。その長い鋏は、カーテンの隙間からわずかばかり入る月明かりに照らされて光っていた。

「…………ふふ……………」

きつと、これで楽になれる。あなたがいるどこか遠く離れた世界にいけるかもしれない。もしかしたら行けないかもしれない。天国に行けるのか、それとも地獄に墮ちるのかわからない。ううん。分かつてる。お父さんやお母さん、マックイーンやライアン達、友達を悲しませるから地獄行きに決まつてる。ごめんなさい。

でも、もう無理だよ。

あたしには無理だった。

この何もかも無くなった生き地獄に、一生抜け殻のようになって過ごすなら、いつそ本当の地獄にでも逝ってしまいたい。あなたにひどいことを言ったり、わざと冷たくしたその罪は償わないといけないね。

両手で持ち、少しずつ首筋に近づけた。ここから勢いで手前に引けば、もうこれまでにできる。

でも、あと一センチ、動かなかった。

その日、久しぶりにベッドに倒れ込んだ。

目を覚まして、今度こそ、全部終わりにしようと思った。今までになく強く固く握り締め、首筋にゆっくり近づけた。先端が皮膚に振れた。あと少し引けば、それで全部終わる。ウマ娘の力がなくても、ただのヒトの力だけでだってできる。

そのはずだったのに。

やはり、今日もそこから手が動かさなかった。

何度も首筋まで持つて行つては、そこから少しも動かさない。あたしにはあたし自身の苦しみを自ら終わらせる力さえもないのかと絶望した。鉄をベッドの上に無造作に放り投げ、そのまま床のカーペットの上に仰向けに倒れ込んだ。ちよつと勢いがつきすぎた。痛

かった。

そして、その勢いでたんすが揺れたのか、頭のそばに小さい何かが落ちてきた。そちらに視線を動かすと、小さな鈴が転がっていた。

これは。

『これやるよ。お守りつてさ、自分で買うより人から買ってもらった方が効き目がいいって何かで見たんだよな』

『そうなんだ。この鈴のお守り、なんか可愛くていい感じだね』

『ベルちゃんあてだからハンドベルのお守りがないかって思ったけどさすがに無かったわ。だから鈴にした。英語だとベルだし』

『さすがにハンドベルのお守りはどこにも無いと思う』

『だよな。ま、その鈴はハンドベルっぽい音がするし、身につけやすいだろうし、もとも

と鈴は魔除けにも効くしな』

『……ありがとう。あなたにも御守り買ってあげる』

『いや、アタシはいいわ』

『買う。そしてあげる。拒否権はないから』

『言い切り!? しかもフルパワー押しの手!?』

『はい。厄除けのお守り』

『アタシが丸ごと祓われちまいそうだな。いろいろなところに厄を撒き散らしちまったしな』

『そんなわけない。あなたは私の救世主で恩人で、好きな人なんだから』

『さらっと好きって言うてくれるようになったねえ……ありがとうな』

『だからさ、ずっと一緒にいようね』

そういえば、あの日はあなたの家に行ったらなんか妙に酒くさくて、あなたも妙に頭

痛をこらえてそんな顔をしてて、臭いを頼りにキッチンを探したら、片隅からお酒の**いっしょうびん**一升瓶が見つかったんだった。怒つて、二日酔いに効くドリンクを買って飲ませて、今度やつたらあなたを二十四時間そばで監視する、つて重いどころか闇深いことを言つて、その後に一緒に神社に行つたんだった。

ひとつ思い出すと、今までなんで思い出せなかつたんだろうというくらい、細かい出来事がどんどん記憶の奥底から浮かび上がってきた。

☆ ☆ ☆

あなたのことを知つたのは、マックイーンとあなたが親しくし始めた時のことだった。それからずっと二人は仲睦まじく、羨ましいくらいだった。あなたが後に語つた話からすると、もしかしたらこの時のあなたは本当の『あなた』ではなくて、別の人か、あるいはそもそもあなたをこの世界に連れてきた何者かが作つた偽りの記憶だったのかもしれないけれど。

いつしか、あなたはマックイーン以外の複数の人と親しくし始めた。マックイーンは嫉妬に狂ってあなたを手にかけてようとした。マックイーンはメジロの家に軟禁され、あなたは孤独になり、壊れ、そして学園を壊した。

あたしが落としたスケッチブックを拾ってもらったとき、あなたはずっと独りだった。あなたから絵を描いてくれと頼まれた時、実は嬉しかった。絵を褒めてくれた時はもっと嬉しかった。

あれから、何かと口実をつけてはあなたに会いに行った。あの頃はいろいろと話せる友達がいなくて、家族や親戚にもなかなか相談できなかったのは確かだけど、もし友達がいなくても、家族に相談できたとしても、きつとあなたに会いに行ってた。メジロ本邸のSPの人達や、自分を担当してくれたトレーナーが密かにあなたのところに誘導してたのも、実はわりと早いうちに気づいてた。

最初に本当の名前を隠したのも、マックイーンと同じメジロの一員だと知られて遠ざけ

られたくなかったからだだった。結局、メイクデビューを応援してほしい一心で出場レースを伝えてしまつて、そこから名前をバラすことになってしまった。でも、あなたは受け入れてくれた。

あれからずっと好きだった。変わり果てたマックイーンがあなたを襲撃した時、とつさに身体が動いた。あなたを助けるためなら選手生命も、命そのものさえも絶たれても悔いは無かった。

有馬記念に出た時、思うように結果が出せなくて、逃げ出して、途方に暮れていたのを迎えて来てくれた時、やつぱりあなたがいないと駄目だつて悟った。そして自分にとって一回目のエリザベス女王杯の直前、お互いに自爆してなし崩しで告白してしまった。やつと一緒になれた気がした。

怪我をして、あなたに告白したマックイーンと張り合うように一緒に旅に出て、あなたの秘密を知つて、泣いて。絶望と衝動であなたと身体を重ねてめちやくちやにして、お互

いに破滅して果てようとしてあなたに止められて、最後の時までできるだけ長く一緒にいようとしてくれた。

そして、二回目のエリザベス女王杯の日の夜。まだ半月くらいしか経っていない、最後の日。

あなたは、最後まで笑顔だった。

なのに、今のあたしは。

「……………うつ、つ、」

命を捨てようとしたあたしをあなたが見たら、泣いて悲しんだかもしれない。いや、もしかしたら怒って鉄を取り上げて、頬ほおを平手打ちして、そして抱き締めてくれたかな。いずれにしても、あなたはあたしがそうなることを決して望まないのは確かだって、わかる。

ひどいことをしようとしたあたし自身を許せなくて、くやしくて。

そんなことをしたって、あなたにはもう会えないのに。

もう、会えないんだ。

「……っ、ひっ、うっ、うわああああああああん！」

自分でもびつくりするくらい声が出た。涙も声も堰^{せき}を切ったように一気に溢^{あふ}れ出た。

「ドーベル！」

「ベルちゃん！」

大きな音がして、部屋に誰かが入って来た。抱き起こされ、抱き締められた。お母さんだった。

ずっと小さい時の思い出のようにあやされ、ずっと泣いた。しばらくしてお母さんが離

れ、今度はマックイーンに抱き締められた。

「……ごめん、なさい……」

「謝ることではありませんわ。……とにかく、無事で良かった」

「うん……」

ようやく落ち着いて、マックイーンの顔を改めて見ると、マックイーンがあたしを見つめて苦笑した。

「ドーベル、その、申し上げにくいのですが……。今のドーベルは私が着の身着のまま北海道の本邸から東京まで旅をしてきた時とそっくりです。一息ついたらお風呂でリラックスしましょう」

「わかった……」

自分でもわかる。もう十日もお風呂に入っていない。制服も何もかも着たまま、髪も尻尾もぼさぼさ。たぶん、今のあたしを見ても、誰もメジロドーベルとは気づかないに違いなかった。鏡を見ると自分の姿なのに失神するかもしれない。

「あと、ドーベルに少々謝らねばならないことがあります」

「なに？」

「先ほどここに突入する時、ウマ娘として出せる全力で扉を蹴破けやぶってしましまして、修理不可能なまでに粉碎ふんさいされてしまいました。事前に業者に聞いてはいましたが、代わりの扉の手配がどんなに早くても明後日になるそうですので、少なくとも今日と明日は部屋が素通どおしになってしまいます」

「いいよ。もとはあたしのせいだし。……マックイーン、やつと力が取り戻せたんだね」

「……そうですわね。あの時からもう一年以上、とても久し振りの感覚でした」

「うん……」

それからお風呂に入って、すべてを洗い流した。全身を念入りに丁寧に洗っていたら一時間以上経っていた。髪や尻尾を乾かすのはマックイーンが手伝ってくれた。

「ドーベルがもとの美しい姿に戻って良かったですわ」

「やつぱり、汚かった？」

「正直に申しまして、雨の中ぬかるみに突っ込んで転げ回って、うっかりドブにもはまってそのまま帰ってきたワンちゃんのようにでした」

マックイーンは精一杯オブラートに包んで、オブラートどころかもっと分厚い紙に包ん

で表現してくれたのだけれど、お風呂に入る前の表情と今の表情、かすかな自分の記憶を思い返せば、実態は火を見るより明らかだった。

「……………もう外歩けない」

「綺麗になったので問題は解決しましたわ」

「そうかな……」

「ええ」

心身を回復させるために数日休んだ後の週末、あることを決意した。

「美容院行ってくる」

「気をつけてね」

お母さんに見送られて家を出た。歩いて十分ほどのところに行きつけの美容院がある。行きつけと言いつつも、今年は夏以来行けていなかった。

「こんにちは」

「いらつしやいませー、あら、ドーベルさん！ お疲れ様です！ あとおめでとうございます！」

「ありがとうございます」

いつもの美容師さんが笑顔で出迎えてくれた。二十代後半くらいのヒトの女性で、あたしがここに通い始めた当初からカットなどをしてくれていた。

「今日はちよつとお願いがありまして……」

「なんででしょう？」

あたしの頼みを聞いて、美容師さんは叫びかけてあわてて口を閉じていた。もしそのまま叫ばれていたら、あたしの耳は三十分ほど使いものにならなくなっていたに違いない。

「髪切っちゃうんですか!？」

「はい。そして、その髪をヘアドネーションに提供したいと思います。確かこちらではドネーションカットもしてましたよね？」

「え、ええ……確かにドーベルさんの髪の高さは基準を満たしていますので受付できますが……その、差し支えなければ、どのような決意で……？」

「はい、その……失恋しました」

美容師さんがまた叫びかけて今度は手で自分の口を塞いでいた。

「えええええええ、い、いつの間に付き合ってた、の??？」

その言葉に、心がちくりと痛んだ。この美容師さんにはあなたのことを話していて、時々相談にも乗ってもらっていたんだけど、残念ながら美容師さんの記憶にもあなたのことは残っていなかったみたい。

「付き合っていました。でも、いろいろあつて遠くに行っちゃつて。向こうの事情で遠距離恋愛も、また帰ってくることもできなくなっちゃつた、から」

「はへえ……あ、失礼しました。ついマヌケな声がもれてしまいました」

「ふふっ」

「そのー、さらにつかぬことをお伺いしますが、やはり新たな人生？ に進むためにヘアスタイルを変えるといふ感じですか？」

「いえ、むしろ逆かもしれません。あの人のことをずっと忘れないために、そして、鏡を見ながら思い出すためです。……まだ十代なのに超重いですよね」

「重ッ！ あ、しししし失礼しました。つい本音が」

美容師さんからの言葉が嘘も飾りもない、掛け値なしの本音だったので、逆に清々しく笑いたくなくなった。

「ぎつくばらんで率直な感想ありがとうございます」

「いえいえ。あー、そっかー。……失恋、ですねぇ……」

美容師さんと話し合って、残す髪の毛の長さはミディアムくらいに決めた。ショートだとちよつと短いかなと思つたから。

「では、参ります」

「お願いします」

しゃく、と軽い音がして、束ねた髪の一束目が切られて横の台に置かれた。結構長い間ともに過ごした長い髪との別れは感慨深いものがあつた。全部で八束分切り離された後、鏡の中の自分を見ると、一瞬誰だか分からないウマ娘がそこにいた。

「こちら八束分、袋に入れてお渡ししますので、こちらのチラシの手順に従つてドネーション受付の団体のところにお送りください」

「ありがとうございます」

「それでは、新生・メジロドーベルさんのミディアムヘアを最高のヘアスタイルにさせていただきますよー！」

美容師さんがとても目を輝かせて鋏はさみと櫛くしを構えたので、勢い余つてライアン並みのべ

リーショートにならないよう念入りをお願いした。

「はい！ できました！」

カットとシャンプー、トリートメント、念入りなブローを経て、本当に今まで見たことがないヘアスタイルになっていた。別人が鏡に映っているかのようだった。少なくとも、数日前の髪も何もかもボサボサのヨレヨレになっていた謎の蠢く生命体とは全く違っていた。

「なんだか別人みたい」

「別人ですねえ。ご家族の方もドーベルさんだと気付かないかもしれませんね。バックヤードに積んであるお子さんへのプレゼント向け金塊チョコ三本賭けます」

「賭けないでください……」

話の流れで本当に金塊チョコを三本貰ってしまい、ヘアドネーションで送るための髪を入れた袋とともに紙袋に入れてくれた。

家に帰ると、ちょうど玄関の前で道向こうからやってきたマックイーンに出会った。立

ち止まったあたしにマックイーンが声を掛けてきた。

「ごきげんよう。こちらの家にご用ですか？」

「はい」

「では私が取り次ぎしましょう。私、メジロマックイーンと申します」

「どうぞよろしくお願いいたします」

マックイーンはあたしに全く気づいていなかった。マックイーンの後をついていき、マックイーンが中に呼び掛けようとしたところで、何かに気づいたかのようにこちらを向いた。

「そういえばお客様のお名前をお伺いうかがしておりますませんでした。お名前を伝え忘れたら取り次ぎできませんでしたわ」

「そう、ですね……」

笑いそうになるのをこらえて相槌あいづちを打つ。

「お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「はい。メジロドールと申します」

「メジロドール様ですね——へ？　え？」

真顔になったマックイーンが後ずさりをしてあたしを上から下までジロジロと眺めた。

「……ドーベル？」

「うん。あたし」

「……髪、ばつさり切ってしまったのですか？」

「うん。ヘアドネーションに送ることにした。切ったのはまとめてもらってここにある」

「は、はあ……」

呆然としたままのマックイーンともども家に上がり、お母さんに会ったら目を丸くしていた。それもそうか。しばらくしてようやく我に返ったマックイーンが、あたしを見ながらしみじみとつぶやいた。

「しかし、思い切りましたわね」

「うん。あの人のことを忘れたくないから、髪を切った日として記憶しておこうと思つて」

「なんというか……その……心持ちは大変理解するところではありますが……」

「やつぱり重いよね。美容師さんからもドン引きされた」

「まあ、そうでしょうね……」

週明け、登校した足でトレーナー室に行った。

「失礼します」

「どうぞ。……おや、ドーベルさん。髪型を大きく変えましたね」

「やつぱり、トレーナーは違うね。マックイーンは全然あたしだって気づいてくれなかったから」

「教え子の姿を見分けられなかったらトレーナー失格ですよ」

「そ。ありがとう」

少し話をして、明日今後の進路について話し合うことにして、次は教室に向かった。ドアを開けた瞬間、教室中のクラスメイトが駆け寄ってきた。親友達はさらにこちらに向けて飛びついてきた。

「ドーベルちゃん！ おめでとう！ そして大丈夫だった？ なんか倒れたって聞いたから心配で心配で……」

「うん……ちよつと家で休んでた」

「良かった……」

「髪も短くなってる！ 心境の変化？」

「まあ、そんなところ」

「今日は授業受けてくの？」

「うん」

「はいノート！ なんかドーベルさんが留守にしている間に数学の授業がかなり進んでね、遠征組特別授業コースだけだと厳しいと思ったから」

「ありがとう！」

久しぶりの授業は、初めは分からないところが多かったけど、さっきのノートのおかげでだいぶ理解ができた。

放課後、またトレーナー室に寄って挨拶をして帰宅した。そろそろ家から学園の寮に戻っていつもの生活リズムに戻したい。そして、次を見据えないと。

第二章 追憶、そして新たな道へ

久々に登校した次の日、授業の後にトレーナー室に行った。

「トレーナー、昨日言ってた今後の進路の件なんだけど……」

「はい」

少し沈黙して、思い切つて宣言した。

「トウインクル・シリーズを引退して、大学に行こうと思う。ドリームトロフィーリーグへの移籍はしない」

トレーナーは表情を変えることなく、うなず頷いた。

「分かりました。ドーベルさんの意思をそんちよう尊重します。参考までに、引退を決めた理由を教えてください」

「うん……。あたしが退院した後にここに来た時、ある人のことを覚えてるか訊いたのを覚えてる？」

「はい。私の記憶から抜け落ちてしまっている誰かがいる、そうですね？」

「うん」

「あれから仕事の合間に調べていましたが、全員が忘れ去っているけれども、明らかに多くの物事を成し遂げた誰かが存在していたらしいことまでは掴めました」

さすが、あたしのトレーナーだと思った。誰かがいたと気付いてくれた、それだけでも十分だった。あなたが成し遂げてくれたことをきちんと認識してくれる人がいた。

「しかし、そこから先が何も掴めていません。理事長やたづなさんの許可を得て過去の在籍記録を見たところ、ある時期に当時学園に在籍していたウマ娘の六割近くが何らかの理由で停学処分を受けていました。その一方で、生徒育成委員会の記録には『学園内で多発した暴力事案により複数名を停学の処分とした』とだけしか書かれていませんでした。その事案のことは私は全く記憶していませんでしたし、理事長やたづなさんもそのような記録があつたこと自体を初めて知つたとのことでした。それ以外の人も誰も覚えていませんでした」

「そうなんだ。……その事件は、確かにあったよ」

「ドーベルさんは、何か覚えてらっしゃるのですか？」

その言葉に、あたしは頷いた。

「本来の話からは脱線しちゃうけど、みんなが忘れた『誰か』の話をしてもいい？」

「ぜひ」

「結構長くなるかもしれないけど」

「もともと、この時間はドーベルさんのための時間です。じっくり伺いたいと思います。」

長丁場^{ながちやうば}に備えてお茶とお菓子を用意しなければ」

「……ありがとう」

応接スペースのソファに移動して、トレーナーと横並びになるように座った。あたしとトレーナーが二人だけの時は向かい合うように座るのが常で、あたしとトレーナーが並んでいる時は、あなたがその向かいにいた。でも今はそこには誰も座っていない。二人だけなのにこのように座って話するのは、さながら、亡くなった人への追憶^{ついで}のようだった。

「あたしがトレーナーと出会う少し前、あるウマ娘に出会ったの。その人の名前は『ゴー

ルドシッポ』って言った」

あなたと出会ってから、たった一回だけしか呼ぶことがなかった、あなたの名前。もう呼びかけることはできない。

「あの人は独りぼっちだった。誰からも避けられてた。いろいろあつて学園の人間関係を壊してしまつて学園が混乱して、あの人もどもも生徒がたくさん処分された。……実はそのきっかけはマックイーンだった。あの人とマックイーンが付き合つてて、でもいろいろあつて関係がこじれて、そして仲違^{なかつたが}いして。……マックイーンも、あの人も、壊れてしまった」

トレーナーが淹^いれてくれた温かい緑茶を一口飲んだ。身体だけでなく、話を始めて過去を思い出したせいで少し冷えた心が温まつた。

「ある時ね、たまたまあたしがスケッチブックを落として、それをあの人が拾ってくれたのが出会ったきっかけだった。少し話をして、自分を描いてくれて頼まれたのを引き受けた。用事でちよつと遅れたら、もう来ないかと思つてたみたいなことを言われて、あの時はちよつとムツてしたけど、ずっと誰からも避けられてたから、あたしも来なくなるに

違うないって思ってたんだ、って今ならわかる」

「その時に名乗ったんだけど、はじめはちよつと怖くて『ベル』って名乗った。あの人が怖かったんじゃないくて、あたしがメジロのウマ娘だつて、あの人が壊れる原因になったマックイーンの親戚だつて知られるのが怖かった。それを知られたらあの人から避けられるって思ったから。でもそう思うって時点で、あたしはあの人のことを好きになつてたんだと思う。……実はその時にはあたしがメジロドーベルだつて一瞬で見抜かれて、知らないふりをしてくれてたって後で分かった。あの人はメジロだからって避けたりしなかった」

「あの人はあたしの絵を褒めてくれて、とても嬉しかった。いろいろ話を聞いてくれて、アドバイスもくれた。そのおかげでトレーナーに会えた」

少し息を入れた。静かに聞いていたトレーナーが得心とくしんが行った風に語った。

「なるほど。私がドーベルさんと出会った時に、実はゴールドシップさんという方が関わっていたと」

「うん。トレーナーが男の人だったから反射的に断ってしまった、って言ったら、学園のトレーナーはヘンタイばかりだから一度追い払われたくらいじゃびくともしないって」

「ハハハ、確かにこの学園のトレーナーは変な人間揃いですね。私も一度で引き下がるつもりはありませんでした。とはいえ、実はドーベルさんに断られた後、ちよつとだけへこんだことを今告白しておきます」

「ごめんなさい……」

「いいんですよ。その後すぐにドーベルさんから話をしに来てくれたんですから」

「うん。……それから暇を見つけてはあの人に会いに行つた。あの時はありがと。あの人のところにとくにさりげなく案内してくれて」

「『今』の私はそのことを全く覚えていませんが、『かつて』の私宛てとしてその言葉を受け取っておきます」

トレーナーの言葉から、やはりあの人が存在が消えてしまっていると改めて認識させられて、ちくりと心が痛んだ。

それから、トレーナーにあの人との思い出を、思い出せる限り話した。時々休みつつ話して、気が付けば一時間近く経ってしまっていたけど、その間、トレーナーは静かに話を

聴いてくれた。

「あたしのことをずっと導いてくれて、マックイーンといろいろあった時もなんだかんだでうまく仲直りしてくれて……恋のライバルは増えちゃったけど。怪我をした時もいろいろ励ましてくれて、一緒に旅行して、そして——」

そして、あの人の秘密を知った。避けられない永遠の別れ。

「実は今年の春、あたしがあの人を襲って心中——しんじゆう——本当に命を絶たないまでも、選手生命を完全に絶って破滅するつもりだったって知ったら、怒る？」

「そうですね……強く叱責したかもしれません。しつせき私の中には、春の時期にドーベルさんが急に精神不安定になって、でもすぐに立ち直った時期があつたと記憶しています。あの時でしょうか。もしそのゴールドシップさんがいろいろしてくれたおかげでドーベルさんが立ち直ってくれたなら、私は最大の感謝をしなければなりません」

「そうだね……感謝したい」

そして今年のエリザベス女王杯の夜。

「あの日の夜がね、最後だったんだ」

あの日を思い出して、心がすつと冷えた。とても悲しくなった。

視界が霞んだ。それが涙だったと気づいたのは、トレーナーがハンカチを差し出してくれたからだった。

あたしは一回壊れた。命を絶つことも考えてしまつて、でも実行に移せなかった。そして、いなくなつてしまつたあなたのおかげでなんとかここにいる。立ち直つたわけじゃない。もつと時間があると思う。もしかしたら一生立ち直れないかもしれない。

少なくとも今のあたしは、過去を思い切り引きずつてる。あなたのことを永遠に記憶するために髪を切つて、美容師さんやマックイーンにドン引きされるような十八歳になつちやつてるから。

未来、三十歳のあたしはそれを笑うかもしれない。あなたはどうかだろう。あたしのことを笑い飛ばしてくれるかな。それともあたしのことを怒るかな。

「ハンカチ、洗つて返すから」

「お気になさらず」

「ありがと。ごめん、なんかとても湿っぽくなっちゃったし、元の話からだいぶずれちゃった気がする」

「いえ。話すことで心の整理がつく効果があります。あと、ドーベルさんのお話は私のこれからの業務遂行にも大変有益でした。ゴールドシップさんがみんなの記憶から消えて、ただ諸々の業績だけは残っています。その不整合のせいか、この一か月ほど方々でトラブルが発生していきまして、私が暇だからと調査委員会の委員長を押しつけられてしまっています」

「そうだったんだ……」

「その不整合の発生要因が、一人の消えたウマ娘のためだと分かれば、事態の解明と解決策の実行に役立ちます」

「大変そう……」

「大変です。今まではドーベルさんがいるから疲れた身体に鞭打むちうちって頑張れましたが、ドーベルさんが引退すると気が抜けて職務が滞とどこおるかもしれません。何だかんだで、初めて私が単独でトレーニング指導を担当した生徒でしたから」

「引退、やめた方がいい？」

「それには及びません。トレーナーはウマ娘のよりよい人生を支えるためにあります。逆に心配されるようでは師匠から怒られてしまいます。あと、そのゴールドシップさんから『トレーナーがベルちゃんの足引つ張ってんじゃねえ！』ってどやされそうです」

「そうかも……トレーナーの口調、あの人にそっくりだった。声は全然似てないけど」

「そうですか……なら一層頑張らないといけませんね。調べがついている誰がやったか分からない業績の数々からは、ゴールドシップさんはトレーナーのトップとしてお迎えしたいくらいの超人だとうかがえます」

「だね……本当にすごかった」

あなたのことを思い返すと、まだつらい。でも、目標にしたら頑張れそうな気がする。

「トレーナーの質問に答えなきゃね。あたしが引退を決めた理由、だったよね」

「ええ。私も忘れかけていました」

「ふふつ。……ひとつはね、やつぱり、あの人がいなくなつて心が一度折れちゃったから。トレーナーは分かつてるでしょ？ あたしがもう全盛期を過ぎたのと、全盛期を過ぎ

たウマ娘が調子を崩すともう第一線には戻れないってこと」

「はい。データと、直近のドーベルさんの走りを見て把握しています。中には現役を張り続けて勝利する方もいますが、それは十数年見て片手で数えられるほどしかいません」

「だよ。……そして、理由はもうひとつ。あの人みたいにみんなを指導したり、お世話をしたりできる人にならなくなった、から」

「なるほど」

実は理由の二つ目は、さつき話をしていきちんと意識したものだ。もともと、あの人からは先生や保育士に向いているんじゃないかと言われたことは覚えていて、そこから何となく、引退後はそっちを目標そうと思っていた。そして、さつき話して再認識して、そして目標が決まった。

「わかりました。お話しいただいてありがとうございます。引退の届出などの諸手続きは私がすべて行います。ドーベルさんの戦績ですと間違いなくURAから引退式の開催要請が来ますので、その心積もりはしておいてください。引退式の際には記念ライブもありますし、おそらくマスコミからは髪を短くした理由を根掘り葉掘り訊きかれると思います。特に乙名史おとなしさんは訊きたがります。記事にしないにせよ、深く知りたいと強い押しで迫って

くると先輩トレーナーから聞いています」

「わかった……いろいろ準備しとく」

「よろしく願います」

一礼してトレーナー室を出ると、外はすっかり暗くなっていた。その足で久しぶりに美浦^ほ寮に行く^ほと、寮長のヒシアマゾン先輩に出迎えられて抱き締められた。その後ろからルームメイトのタイキシャトルが全力アタックしてきて、その衝撃で三人揃って玄関先に倒れ込んだ。騒ぎを聞きつけた寮生がみんな出てきて、温かく出迎えてくれて嬉しくなつて涙が出てきた。

みんなが戻った後、ヒシアマ先輩とタイキには引退を決めたことをこっそり伝えた。タイキが絶叫^{ぜっきょう}しかけたのを全力で押しとどめ、発表が明後日水曜日になるのでそれまではまだまわりに伝えないでほしいと頼んだ。

この日はまだ寮ではなく、自宅に帰った。数日前まであたしが固く閉ざし、マックイー^{マックイー}ンの力でこじ開けられた扉がようやく新しくなつて取り付けられていた。

もう、閉じ込めるのはこれっきり。あたしが頼んだ通り、新しい部屋の扉には鍵はない。物を置いて押さえ込むこともできないように外開きにした。ちよつと大掛かりな工事
で、これから寮に戻ったり、大学に進学したら一人暮らしをしたりであまり使うことはな
いの^{もつたい}に勿体ないかなと思つて、工事代金はあたしが貯^ためてきた出走奨励金^{しゅつそうしょうれいきん}から出すと
言つたけど両親から断られた。

ゆつくりと息を吸い、吐いた。

決断、決別なんてかつこいいことはできないし、やりたくない。だから、全部を抱えた
まま。

一歩、踏み出そう。

*

*

*

翌日、火曜日は自宅を出発して寮に帰宅するので、荷物が少し重かった。お母さんが手を振って見送ってくれた。

学校に着くといつもの友達が出迎えてくれた。

「おはードーベルさん、荷物が山登りするみたいにいっぱいだねー？」

「今日からまた寮で暮らすから、家からいろいろ持ってきたんだ。ちよつと買い足してたアロマとか」

「なるほろ、ろろろろろ」

「ドーベルちゃんおはよ！」

「おはよう」

「一時期ちよつと暗かったけど、なんか髪と一緒に吹っ切れた感じ」

「そう、かな」

「ま、ぼちぼちやってこ！ G I五勝ウマ娘だ、エリ女連覇ウマ娘だなんだって言っても、ベルつちはベルつちだし」

「ありがとう。こう、いつも通りに付き合ってくれて、なんかとても落ち着く」

「それほどでも」

「ときにドーベルさんや、顔に重大発表があると書いてありますね？」

「え、あ、その……」

見抜かれてしまった？ それともどこから話が漏れてる？ 挙動不審きようどうふしんになったのが分かったのか、あわてた感じでフォローが入った。

「あーいやいや、みなまで言いなさんな。単にカマかけただけ。我らの業界はいろいろあるからさ、業界人として多少は察しがつくつてもんよ」

「業界人って、わたし達まだ条件戦クラスのペーペーだよ……」

「おだまりなさい！ ドン引きするくらい大泣きするよ!？」

「ごめん……」

「こほん、それでその重大発表とやらはいつ正式にやるの？」

「明日」

「わりとすぐだった！」

「うん……まあ、それこそ察しがついているとは思うんだけど……引退、することに決めたんだ……」

みんなが静まり返った。

「……あの……？」

「なるほど理解した」

「みんな、落ち着いてる……？」

「逆逆、びつくりし過ぎて逆に冷静になっちゃったってやつ！」

その言葉に、また心がちくりと痛んだ。かつてあなたに言われ、そして自分からもあなたに言った言葉。

「まあ、でもエリ女連覇できたんだし、今だといい感じに大学とか行ける年だし、いいんじゃない？」

「そうだねー、ドーベルさんはプロ選手として続けるより、何か学校の先生とか、スポーツインストラクターとかやる方が向いてそう」

「ドーベル先生……あ、いつそトレセンのトレーナーとかどう？」

「トレーナー試験ってかなり難しいらしいよ」

「ドーベルちゃんは学業優秀だから行けるんじゃない？ そのへんどう？ 何か将来のイメージとかある？」

突然降ってきた質問に、ふと言葉がこぼれた。

「幼稚園の先生、とか……」

また、みんなが静まり返った。

「……いい」

「え？」

「めっちゃいいよそれ！ よし早速目指そう！」

「いやいやなんであんたが決めてるの」

「ベル先生か……似合ってる。確か絵を描くのが得意だったよね？ ピアノは弾ける？」

「少し……」

「謙遜けんそんしないの。アタシ知ってるんだから。音楽レッスンの後にこっそり弾いてて、しかも超絶上手ちようぜつうまかったの！」

「ますます適任じゃん！」

みんな、あたし以上に熱気を持って、あたしのふわりとした夢をいいと言ってくれた。

この夢のきつかけになった会話。

『ベルちゃんはさ、絵描くの得意だよな』

『……得意と言っていいかどうかは分かんないけど』

『得意だ。アタシが保証する』

『うん……』

『絵を描く仕事とかでも名を上げられそうだ』

『そう？』

『画家、イラストレーター、漫画家、まず選択肢が三つ』

『画家は無理かも』

『次は……大師匠のこのちみつこ達に懷かれてたし、先生とか保育士とか』

『懷かれてた……の？ どちらかというとなあなたの方が』

『いやベルちゃんの方が懷かれてた。アタシが保証する』

足の怪我でしばらく休養が決まって、レース以外に何も取り柄えがないと意氣消沈いきしょうちんしていたあたしに、いろいろな道を教えてくれた会話だった。

小さい頃からライアンをはじめ、メジロのみんなが教え導いてくれたことを思い出し、次は自分がそうありたい、そうなるべき番じゃないかと思った。

「みんな、ありがとう」

「そんなお礼を言われるほどのことでもないよ、アタシら単に持ち上げまくっただけだし。あ、別に嘘で持ち上げたんじゃないよ？　ちゃんと適任だつてこの頭で考えて推したからね！」

「ホントに考えてた？　直感でベルちゃん推したんじゃない？　あんたこの前の中間テストで現代文四十五点だったよね。評論文を読むのがズタボロだったって言ってた」

「泣くよ！」

「あーごめんごめん」

「ベルさんなら……大丈夫です……きつと」

「うん……」

心が決まった。

幼稚園の先生になるには、その免許が取れる学部に行く必要がある。たぶん教育学部とかになると思うので、今日にでも早速調べて、進路指導の先生とトレーナーに言わないといけないかった。

目指す道が決まると、昨日までと比べて、心持ち授業の内容が頭に入りやすくなったような気がした。

第三章 一歩、踏み出して

水曜日昼過ぎ、トレセン学園の第一会議室には大勢の記者やカメラマンが集結していた。あたしの席はもちろん正面、その隣、向かって左側にトレーナー、そして右側になぜか理事長も来ていた。普通の引退会見だと選手とトレーナーしかいないと記憶していたので、なぜ来ているかトレーナーに尋ねた。すると、意外な返答があった。

「ドーベルさんを守るため、だそうです」

「守る？」

「そうです」

何はともあれ、味方だとわかっている人が多いのは心強かった。

十三時になったところで、司会の職員さんが挨拶をして記者会見が始まった。まずはト

レーナーからあたしの引退についての説明があつた。

「——私からは以上です」

「それでは次に、メジロドーベルさんよりお願いいたします」

記者さん達の視線、そしてカメラが一斉にあたしの方を向いた。数多くのフラッシュが何度も瞬き、シャッター音が響く。少し前までの自分なら、恐怖のあまり何ひとつ声を発せなくなつてしまつていたかもしれない。でも今はそうじゃない。あなたに恥じないよう、前を向こうつて決めたから。

会見席から見て真正面、会議室の壁に掲げられたトレセン学園の校訓、“Eclipse first, the rest nowhere.”を見据え、^{うなず}頷いて口を開いた。

「はい。——私、メジロドーベルは、このたびトウインクル・シリーズを引退することを決意しました。ドリームトロフィーリーグ、その他プロリーグへの移籍ありません。レースではない、新しい道へ進もうと考えています」

会場が大きくどよめいた。フラッシュがさらに無数に焚^たかれて、とてもまぶしかった。

記者さん達がみな今すぐにたくさん質問したような表情を浮かべていたけど、まだあと少しだけ話さないといけないことがある。

「この学園を卒業して、大学に進学します。……具体的にどの学校へ行くかはまだこれからですが、教育系の進路を考えています」

さらなるどよめきが起き、そしてフラッシュがますます光った。

質疑応答の時間になった。司会の人が質問希望の人に挙手を求めたところ全員が手を挙げたため、順番に話す形になった。

多くの記者さんの質問はトレーナーと考えた想定問答集の通りだったので、緊張しつつも答えることができた。想定問答をじっくり考えてきた、私がレース後しばらく姿を見せなかった件についての質問がほとんど飛んで来なかったのは、あたしの両隣にいたトレーナーと理事長のおかけかもしれない。あるいは、あたしが髪をばつさり切つてミディアムヘアにしてしまった方に気を取られたのかもしれない。ちなみに髪を切った理由もほとんど訊かれなかった。

ただひとり、長らくあたしや他の子達を取材している乙名史おとなしさんは、会見終了・解散直後に他の人に気づかれないよう近づいてきて、『必ずオフレコにします』との前置きをし

つつ、あたしが出てこなかった三週間のことを尋ねてきた。

「体調はもうよろしいのでしょうか？」

「はい。ちよつと疲れていたみたいです」

「……不^{ぶしつけ}嫌な言葉で申し訳ありません。……どなたかとのお別れがあつたとお察しします」

「……乙名史さんのもとに何か噂話が伝わってきましたか」

あたしの問いに、乙名史さんはいつもとは全く違う固い表情で首を振つて答えた。

「いいえ。私のもとには一切そういう話は聞こえてきません。自身の実力を過信しているように聞こえるかもしれませんが、私のところに聞こえてこない、すなわち、他のメディアや世間には一切噂話は流れていないと考えて頂いて差し支えありません。知っている方がいるとしても、ドーベルさんがご存知であろうごく限られた範囲にとどまると思われるます」

「そうですか。それは良かった。……端的に言えば、永遠の別れです。死別というわけではありませんが、それよりもなお苦しいかもしれません」

普段はせわしなくメモ帳に筆を走らせる乙名史さんが、一切そうした素振^{そぶ}りを見せな

かった。彼女はただ瞑目^{めいもく}して、それから静かに語った。

「私から申し上げるまでもありませんし、現在の面持ちからはアドバイスの必要もなさそうかと思えますが、……つらい時は、いっぱい泣いてください。別れを忘れられるはずがありませんから、泣いて、その想いと永く付き合っていくしかありませんから」

「ありがとうございます」

あたしのことを心の底から思い遣^やってくれてのその言葉が、とてもありがたかった。

乙名史さんとの立ち話の後、あたし、トレーナー、理事長の三人でそのまま理事長室へ向かった。理事長室ではたづなさんが待っていて、あたしとトレーナーは応接スペースに通された。

「慰勞^{いろう}ッ！　まずは記者会見ご苦勞であつた！」

「ありがとうございます。理事長のおかげで私もだいぶリラックスしてドーベルさんのことについて話すことができました」

「それは重^{ちゆうじゆう}畳。メジロドーベル、キミはどうだ？　だいぶ疲れたのではないか？」

「はい……でも疲れは少しだけです。無事会見を乗り切れてほつとしています」

「よろしい！」

たづなさんが用意してくれたお茶を飲んでみると、さらに二人の訪問者が来た。あたしにとつては雲の上の存在だった。

「メジロドーベル、ご苦勞様」

「中継で観ていたが、実に立派だったな。ドーベル」

「会長……エアグルーヴ先輩も……!! どうして」

「もちろん、君がG I レース五勝を成し遂げた偉大なるウマ娘であるから、という理由もあるが——」

「長らく縁があり、自分を追う者、そしてある時からは自分が追う者となった後輩の節目の時に、馳せ参じない者がいるだろうか」

「ありがとうございます……っ！」

先輩に称えられ、感動のあまり涙がこぼれた。

「ドーベル、お前にいろいろあったということはメジロ家の面々からそれとなく伝え聞いている。ずいぶん泣いたことだろう。泣くにもいろいろあるが、泣く時には泣くべきだ。とはいえ、できれば嬉し涙の方がいいが」

「はい……」

「また笑顔を見ることができて嬉しい。これからも精進しやうじんするように。……まあ、わざわざ言うまでもないのは知っている」

「ありがとうございます」

それからトレーナー室に戻り、これからのスケジュールの詳細を二人で詰めた。

「さて、ドーベルさん。今はすでに十一月下旬を迎えています。国公立大学や共通テストを利用する形の私立大学ですと、すでに最初の入試まで二か月を切っています」

「うん」

「普通であれば、これから一年間を受験勉強に充てある策を取るところです。トレセン学園から一般の大学に進学する生徒さんの多くはその道を選びますし、そのための予備校的な学習コースも用意されています。しかし」

「しかし？」

「ドーベルさんの座学の成績を見ていますと、今年度早速受験する価値があるように思います。これまで模擬試験こそ受けたことはありませんが、私の見立てではこの結構高いレ

ベルの大学も射程圏内しゃていきんないだと考えています」

トレーナーが出してくれた大学一覧を見ると、表の上の方にラインが引いてあった。

「ここ……」

「そこが志望校のひとつですか？」

「うん」

あたしが目指している分野でいくつか選び出した大学のひとつがそこだった。国立でたくさんの科目を勉強して受験しないといけないけど、学費が安くて済むのが魅力的だった。レースで勝ってきたおかげで貯金はたくさんあるけど、節約するに越したことはない。

「ドーベルさんの今までの定期試験の成績から見ますと、この大学であっても十分今年度合格が果たせると思います」

「本当？」

「ええ。ただ、私が言うだけでは信じにくいと思いますし、大学の試験の傾向をつかみつつ、親御さんにその道が十分現実的であると分かっていただくためにも、模擬試験を受けることが大変重要だと思います。幸い、再来週にその大学を目指す人向けの実戦型の模試

があります。いかがでしょうか」

トレーナーからの提案を受けて、ちょっと考えた。じっくり勉強する環境は整っているし、合格できる可能性はたぶん高くなる。でも、今年度でも合格できるかもしれないなら、模擬試験だけでも一応受ける価値はあるかもしれない。受験手続をトレーナーから教わり、さらに進路指導担当の先生に大学受験をすると伝えて、三者面談の日程を組んでもらった。

三者面談の結果、進路指導の先生も、両親も今年度の受験を勧めてくれたので、そこから本格的に受験勉強に入った。年度途中ということもあってクラス異動はなかったものの、今までのクラスの教室に行くのは朝と帰りだけになり、昼間は別コースでの授業になった。友人達からの反応はさまざまだった。

「ドーベルちゃんばなればなれになづてもわだじだちズズ友だよ！」
「いやアンタ、私達朝夕会うでしょ、ベルっちドン引きしてんじゃんほら涙と鼻水拭いた拭いた」

「アハハ……」

「今度京都レース場で走ってくるから、その時ついでに市内に回って北野天満宮で受験合格の御守り買ってくるね！」

「ありがと」

メジロ家のみんなも応援してくれた。マックイーンは折に触れて差し入れを持ってきてくれたし、ライアンは気分転換に向いたストレッチを伝授してくれた。ブライトはあたしの机の横で見守ってくれるという新しい子（ぬいぐるみ）を連れてきてくれた。

『今日からおそばでドーベルちゃんに応援をしますの〜』

「よろしくね。お名前は？」

『うーん……ドーベルちゃんがつけてくれる〜？』

「そうだね……、『ノゾミ』はどうかかな？」

『いいおなまえだね！ ありがとう！』

「こちらこそありがとう。よろしくね、ノゾミちゃん」

直近の模擬試験が共通テスト向けと志望校の二次試験向けの二つあって、両方とも受けることにしたので二週間連続で試験になった。あたし達のレースで言うところの『連闘^{れんとう}』で、地方レース組の子でないとまず組まれないような日程だった。後で聞いた話だと、大

学を受験する人でこんな無茶をするのは一般にも、学園の中にもまずいないとのことだった。そうだよね……。

模擬試験の結果は、私でさえも信じられないくらいに良い評価だった。第一志望校がA判定、ほかもちろん申し分なし。進路指導の先生も目を丸くしていた。

「本人の前で言ってしまうのもあれだけど、さすがに入試モードに頭が切り替わるのに時間がかかるから、実力が出せずにC判定寄りのB判定くらいになっちゃうかもしれないって思っ、ドーベルさんやご家族さんに諦めないよう説得する資料を用意していたのよね。出さずに済んでよかった。あなたのトレーナーの見立てはさすがね」

「そうだったんですね……」

模試の結果をトレーナーにも報告しに行き、その時にさっきの進路指導の先生のコメントを伝えると、トレーナーが珍しくドヤ顔になって頷いていた。

「私の目に狂いが無いと証明されて良かったです」

「すごいねトレーナー」

「生徒さんの実力をフィジカル、メンタル双方で見抜く技をずっと磨いてきた甲斐があり

ました。ドーベルさんの次に担当する生徒さん——十中八九チームを組むよう要請されま
すから複数名にはなりますが、彼女達が輝くお手伝いが問題なくできそうです」

「うん。応援してる」

模擬試験の後は、U R Aから要請があつた引退式イベントの準備に奔走した。あたしの
受験の話はU R Aの方にも伝わっていて、負担をできるだけ軽くするプログラムになつて
いた。

そして十二月二十六日、引退式当日。引退式は中山レース場でウイニングライブの後に
開かれることになっていた。この日の中山、すなわち有馬記念ありまきねんの日だった。

今年の有馬記念にはブライトが出ていたので、レース前に控室に応援しに行った。ブラ
イトはいつもと変わりなく、一見ほんわかしたまの雰囲気の中に静かな闘志とうしを見せて
いた。

「ブライト、ファイト」

「ええ」

今日の一番人気はひとつ下のグラスワンダーさん、次いでスペシャルウィークさん、ブ

ライトは三番人氣に推されていた。レースは後方から窺^{うかが}う姿勢で進み、最後に一気に迫り上げるも及ばず五着だった。一着二着は人氣通り、三着はティエムオペラオーさん、四着はツルマルツヨシさんだった。戻ってきたライトはいつも通り静かな笑顔で、でも私とすれ違った後、振り返って斜め後ろから見たら、頬に一筋の涙が流れているのが見えた。

その後、自分も引退式に備えて、控室で勝負服に着替えた。

まだ少し時間があつたので、まずはレースで着ていた方の勝負服に袖を通した。あたしとともにコースを走った、本当に苦楽をともにした勝負服。ウイニングライブ等で着るものと全く同じようにデザインされているけれども、隠れた場所はレース向けにカスタマイズが入っている。そして、白を基調にしているので、長年走っているとどうしても取れずに残る泥汚れが所々にある。あとは布の擦れや端のほつれも細かく見ると結構ある。でもそれこそが勝負服の証だった。

せっかくなのでこの姿でも写真を撮ってもらおうと思ってトレーナーを呼んだ。

「失礼します。おや、そちらはレース用の勝負服ですね。そちらも持ってきていらつしやいましたか」

「うん。あたしがずっと走ってきた証で、この先はもう着ることもないだろうから」

「そうですね。まさにレースの証そのものです。……そうだ、引退式と最終ライブはそちらの勝負服で出てみませんか？」

思わぬ提案に逆に心配になった。

「大丈夫なの？ 鏡に映して見ると結構煤すすけているのが分かつちゃうんだけど」

「はい。それこそが重要だと思います。大きなケガや病気をすることなくトウインクル・シリーズを駆け抜けた偉大なウマ娘・メジロドーベルの証そのものですから。この後の記念写真のカメラマンや引退式の司会には話を通しておきますので、最初の挨拶の時に触れてあげるとファンみなさんが喜びそうです」

「うん。わかった」

トレーナーに何枚か撮ってもらい、それから記念写真撮影会場に入った。あたしが今着ている勝負服がレース用だと知ったカメラマンさんはとても目を輝かせていた。

「メジロドーベルさんがまさに走っていた時の勝負服なんですね！ 私ラストレースのエリア現地で観てました！ あの時のお姿がここに……。髪が短くなっても素敵です！」

「ありがとうございます。もし髪が服に似合わないって言われたらエクステでもつけよう

かと思っていたんですが」

「いえいえとてもいい感じですよ！ ミディアムヘアに見慣れていない人はギョツとするかもしれませんが、そういう人の印象も私の写真で塗り替えてやりますよ！」

「お願いします……」

鼻息を荒くしつつも指示を出してプロの手捌きで写真をどんどん撮っていくお姉さんカメラマンの姿に見とれつつ、言われた通りの姿勢や表情を作っていた。三十分ほどで撮影が終わり、何百枚にもなる写真をさっと見せてくれた。

「掲載候補となる写真は後日お送りして確認をお願いする形となります。お疲れ様でした。……ぐすつ」

お姉さんが涙を流し始めたのであたふたしていると、横からトレーナーがさつとポケットティッシュを差し出した。

「すみません……。こうしてお仕事でメジロドーベルさんに会えるのが最後かもしれないと思うと、感極まっちゃって……」

「ありがとうございます」

「この先の受験とか大学とか頑張ってください！ 応援してます！」

最後にお姉さんと握手して別れた。

『本日の有馬記念に出走したウマ娘達によるメインステージ「NEXT FRONTIER」でした！ みなさんありがとうございました！』

ウイニングライブ司会の方の宣言に沸く会場の声がモニターを介してステージ楽屋^{がくや}まで届いていた。

『そして、今日はこの後特別ステージがあります。エリザベス女王杯を連覇し、先月レース人生有終の美を飾ったGⅠ五勝の女王、メジロドーベルさんの引退式と記念ライブです！ 準備ができるまでしばしお待ちください！』

少し早めに楽屋を出て、ステージから引き上げてくる今日のメインヒロイン達を出迎えた。

「みんな、お疲れ様」

「ドーベル先輩、わざわざありがとうございます〜」

ライブの後も息が上がることなく落ち着いて、たおやかな雰囲気を保ったグラスワンダーさんが優雅に一礼した。その横からスペシャルウィークさんが出てきて、あたしに飛

びつく勢いで迫ってきた。

「ドーベルさん今日でもうお別れなんですか!? あのスゴい走りをもう見ることができないなんて寂しいです!」

「ありがとうございます……確かにレースはもうこれで引退するって決めた。これから大学で幼稚園の先生になる勉強をしようと思ってる」

「将来は『ドーベルせんせい』ですね! 頑張ってください!」

「うん。がんばる」

去っていくみんなに手を振り、最後に残ったブライトと向かい合った。

「お疲れ様、ブライト」

「ええ。がんばりました……ドーベルもいよいよラストステージですわね」

「うん」

「わたくしは、あと少しだけ、走ろうと思っています。最後のステージ、そして未来へ。がんばってくださいね、ドーベル」

「うん。ありがとう……行ってくる」

軽く拳こぶしを合わせ、ステージへ向かった。

「みなさん、今日は遅くまで中山レース場に残っていただきありがとうございます」

あたしの声に、ライブ会場から大歓声が返ってきた。緑に光ったペンライトが振られるのを見た時、初めてのウイニングライブのことを思い出した。新潟^{にいがた}レース場のメイクデビュー戦での初出走初勝利、ウイニングライブの最初の方でいきなりセンタールを務めることに震えていたら、トレーナーが応援してくれた。そして、新潟に来る前にあたしの頭を撫^なでて応援してくれたあ^{ゴルドシップさん}の人のことも思い出した。そしたらなぜか力が湧^わいてきて、堂々と『Make debut!』を歌うことができた。

「今日身にまといっている勝負服、もうこれで最後になるんですけど、実はウイニングライブやイベントに出る時とは違う、本当のレース用の勝負服なんです。よく目をこらしてくださいと、クリーニングしても取り切れない泥の汚れとか、布の擦^すれとか、ほつれとか色々見えてくると思います。ライブ向けと違って見た目は悪いと思いますが、これこそが本当の勝負服なんだと思います」

会場からまた大歓声が上がった。ウイナーズサークルでインタビュを受けて、スタンドに向けて挨拶をする時のことを思い出した。レースの後は汗だくで、距離やバ場状態に

よつては息も絶え絶えになってしまふ。何より、あたしの場合は人目が怖くてなかなかこの服を着た状態では一人一人を眺めることができなかった時期が長かった。

「三年半走つてきてステージに立ったのが二十一回、さらにこうしてセンターに立たせてもらえた時は十回ありました。毎回、とても緊張しました。実は今もとても緊張してます。でも、応援してくれるみなさん、あたしのトレーナー、そしてあたしの大切なヒトのおかげで最高のパフォーマンスを発揮することができました」

会場をどよめきが支配した。それもそうだろう。トレーナーと別枠で『あたしの大切なヒト』と言つてしまえば騒ぎになるのは分かつていた。もちろんトレーナーには事前了承をもらつているし、理事長にも話をして許可をもらつていた。とはいえこのままだと話が無駄に大きくなりかねないので話を続けた。

「ちなみに『大切なヒト』は、とあるウマ娘です。デビュー前に出会つて、たくさんアドバイスをくれました。悩みの相談にも乗つてくれて、応援にも来てくれました。なぜかレースには出てなかったんですけど、走つたらとても強かったと思います」

会場がまた別種のどよめきに塗りつぶされた。レース界に詳しい人は、そのウマ娘は誰だろうと早速調べ始めているに違いなかった。でも、そのウマ娘は調べても決して出てくることはない。あたしに密着取材していても、パパラッチをしていたとしても決してその情報を得ることはできない。

「大切なヒトとは、あのエリザベス女王杯の日の夜に別れました。もう、二度と会うことはできません。生きてはいますが、ここではない、どこか別の世界へ行ってしまった、そんな感じです」

自分で語ったその言葉に、また胸が苦しくなった。目に涙がにじんだ。その様子が客席にも伝わったのか、『がんばれ』という声援、そして拍手、ペンライトの光の波が届いた。

「……ごめんなさい、しんみりとさせちゃって。今日の引退式のことを、あのヒトがどこで見守ってくれていると信じて、ここにいるみなさんと、テレビやラジオ、配信で見守ってくれているみなさん、そしてあのヒトに向けて、ありがとうを伝えたいと思います！」

レース人生最後のセンター曲は『彩^{いろどり} Phantasia』だった。

ライブの時はサブボーカルとバックダンサーがつくとだけ聞いていて、でも誰なのかトリーナーも他のスタッフさんも教えてくれないまま前奏が始まってしまったのでそのまま歌い始めた。そして二フリーズ目、ステージの両サイドから優雅^{ゆうが}な声と清冽^{せいれつ}な声が響き渡った。その声の主を間違えるはずがなかった。

「ラモーンさん、エアグルーヴ先輩……!!」

声がそのままマイクに入ってしまったらしく、二人からめつ、とされてしまった。歌を再開しようとしたものの口がうまく動かなくなつて立ち尽くしていると、先輩が近づいてきて肩をさつと抱いてくれて、そしてようやく客席を見る余裕ができた。そこにはラモーンさんの歌と指揮に合わせてペンライトを振りつつ全力で合唱するファンのおんなの姿があった。

ファンのみんなの歌は、曲の本来の華^{はな}やかな調子とは似ても似つかず、歌詞の通りに強くて、迫力があつて、温かくて、——そんなみんながいてくれることが嬉しくて、あたしものとも全然違う強さを込めて歌い切った。

そして振り返ると、バックダンサーはまさかのクラスメイト達だった。全員が特別仕様

のバックダンサー用衣装をまもっていた。

「いやー、今日の条件戦やらオープン戦やら走ってたアタシらが、まさかティアラ路線G I 限定の曲でバックダンサーをすることになるとはねえ」

「このためにクラスみんな揃ってダンスの教官からビシバシしごかれたんだよー、でも良かったあ」

「みんな……」

涙で前が見えなくなつた。思わずうずくまりかけた時、また温かな声が聞こえてきた。

「泣くのはまだ早いですわよ、ドーベル」

「マックイーン……ライアン……ブライト……」

穏やかな笑みを浮かべたマックイーンが、トロフィーを持って歩み寄ってきた。その後ろにライアンとブライトも。気付けば客席後方には両親や他のメジロ家のみんな、さらになんとおばあ様までいることに気付いた。

マックイーンからトロフィーを受け取って、そして抱き合つた。

マックイーンとあたしと、あの人との間にはいろいろあつた。何なら一步間違えれば血を見るような危機さえあつた。でも、乗り越えることができて、でも、あなたは

なつて。

「きつと、どこかで、あの方も見守つてくれていると思いますわ」

「うん……うん……」

会場からの温かい拍手とひとときわ大きい声援を受け、そして最後にトレーナーと舞台上で握手して、引退式を終えた。

控室に戻つてきて椅子に座ると、一気に疲れが出た。

「ドーベルさん、お疲れ様でした。年末年始はゆっくりお休みください」

「……サブライズ多過ぎ。もうちよつと予告しといてよ」

ずいぶん忙しかっただろうに、そうした素振りを少しも見せなかったトレーナーを睨みつけた。ライブで驚かされ過ぎたことへの八つ当たりなのは分かっていた。それに対してトレーナーは胸に手を当てて優雅に一礼した。なんかちよつとむかついた。

「失礼いたしました。私から企画を提案したら、ラモーンさんが『完全シークレット』というのはいかがかしら？』と、すべてを秘密にする作戦で推し進めてしまっています。クラスメイト全員をバックダンサーに任命したのも驚きましたが、いつの間にかメジロ家の当主

様までサプライズで来ることになっていました」

「ラモーヌさんが……」

それならトレーナーを責めることはできない。いろいろ驚いた中で一番驚いたのはおばあ様が来ていたことだった。本来はおばあ様とは年始のパーティーで会って引退の報告をする事になっていたので、ここに来るとは思ってもみなかった。

「そっか……うん。でも、嬉しかった。こうして走り切って良かったな、って」

「それは良かったです」

「うん。それで、……最後まで、あのヒトに見ててほしかったな、って、……っ！」

不意に心にぽっかりと穴が空いた気がした。気がついたら自分でもびっくりするくらい大声で泣いていて、トレーナーはじつと黙って胸を貸してくれた。

「ごめんなさい……また泣いちゃって……」

「いっぱい、泣いてください。何度でも思い出して、何度でも泣いて、そうして付き合っていくよりほかありません」

「そう、かな」

「ええ」

トレーナーもまるで乙名史さんのようなことを言ってくれた。

帰りはメジロ家の車の送迎もあったけれど、トレーナーと一緒に年の瀬の武蔵野線に乗って府中まで帰ることにした。遠回りだけど一本で行ける、中山レース場への遠征ルート。今日を最後に、しばらく乗ることはないかもしれない。電車の中のお客さんはそこそこ多めで、こちらに向けられる視線はちらほらあったけれど、声を掛けてくる人はおらず、みんな静かに見守ってくれていた。

間章・一 遠い世界を見つめる友達

(Side: アクアマリンエール)

入学式の後、最初の二週間は大学生活や講義に関するガイダンスに充てられていた。結構長い気がしたけど、履修登録りしゅうとうろく? とかいう講義を受けるために必要な手続きとか、大学生活、キャリアガイダンスもいろいろやるらしい。

教育学部は総勢百名とそこそこ大きくて、ガイダンスもそこそこ大きめの講義室で行われていた。今はドーベルちゃんと一緒に座って、ガイダンスが始まるのを待っているところ。

さすがに一週間程度では、新たに話しかけてくれる子はまだ出てきていない。ただ、私

達のまわりを遠慮して空ける感じはなくなり、普通に近くに座る子は増えてきた感がある。あと、いかにも話したそうにこちらをチラチラ見る子もヒト、ウマ娘問わず数人ほど出てきた。この後ドーベルちゃんを引っ張っていつてこちらから話しかけに行こう。

さて、肝腎のドーベルちゃんは、今日もちよつと虚空を見つめてぼうつとしていた。きつと昔のこと、『あの人』のことをまた思い出しているに違いなかった。ここまでに聞けたその人についての情報は五つあった。

- ・ウマ娘である。
- ・ドーベルちゃんの初恋の相手で、生涯で最初で最後の相手でもある。
- ・レースには全く出たことはない。
- ・レースに出れば八大競走でさえも制覇できるくらい強かった。
- ・訳あつて今後永久に会えない。この世界にいないという理解でも間違いない。

二つ目を聞いた時、ついうっかり口をついて『重ッ!』という言葉が漏れてしまったの

は記憶に新しい。慌てて腰を九十度に曲げて謝った。ドーベルちゃんは悲しそうに笑って、同じことを行きつけの美容師さんにも言われたと教えてくれた。

四つ目はおよそ信じがたい内容で、きつとドーベルちゃんの思い出補正でかなり誇張こちやうされているんだろうと思っただけ、それをズバツと言っちゃうとドーベルちゃんが悲しみそうだったので言わない。言う意味もないと思う。

五つ目に至ってはもはやおとし話、まるでかぐや姫みたいな話だった。あれと違って、姫の方がこちらに遺のこされてしまっているけど。

傍はたから見ている、ドーベルちゃんは現役時代にテレビ越しに見ていた時よりも儚はかない雰囲気が強くなっている気がしていた。最初は普通の女の子だなと思ったけど、この一週間でその身にまといっている儚さに気づいてしまった。なんだかこのまま、どこかここではない世界に行つてしまいたいような感じだった。

ガイドランスをしてくれる先生と職員さんがやつてきたので、そろそろドーベルちゃんを『いちら側』に引き戻さないと。

「ドーベルちゃん、ドーベルちゃん」

「——え？ あ、ごめん。また考え事してた」

「そろそろ始まるよ」

「ありがとう」

一時間半くらいかけていろいろ説明を聞いたけど、八割方右から左に抜けてしまった。ヒトだと『耳がちくわになる』みたいな言い方になると昔習ったような気がする。ウマだと『バ耳東風』なのかな。違うか。手元に資料やパンフレットがあるから中身が通り抜けてしまっても大丈夫だと信じた。

ちようどお昼時、天気もいいので学食でお弁当を買って芝生広場のベンチっぽいところで食べることにした。さっきのガイダンスの時にこちらに話しかけたそうにしていた、ちよつと内気そうな子も引つ張つてきていた。その子はヒトだった。名前は香澄^{かすみ}ちゃん。

「いただきます」

栄養のバランスが取れたお弁当が五百円、生協の営業努力を感じる一品だった。とはいえ学生の身だとそこそこ値段が張るので、買うとしたら週に一回くらい。あとは学食でもう少し安く上げるか、いずれ家でお弁当を作つて持つてきてみようと思う。

「ドーベルさんはどの先生になりたいって決まつてる？ 小学校？ 中学高校？」

「あたしは幼稚園の先生になりたいって思ってる」

「そっかー。となると二年前期からは専攻が分かれる感じだね。私は小学校の先生志望」

「ふむふむ。私はドーベルちゃんと同じ幼稚園の先生の方方向性で考えてる」

「そうなの？ アクアがいたら心強いかも」

「誰か知ってる子がいると困った時に教え合ったりしやすいからいいよね」

「うん。私も同じ小学校の先生志望の子と友達になろうかなって思ってるんだけど、ちよつとハードルが高くて」

「ダイジョブダイジョブ、見た感じ、教育学部の子達はみんな飛びかかってでも友達を増やしに行こうって雰囲気だったから！」

「そこまで見抜けるんだ。沙織さんすごい……」

「アクアすごい……」

ヒト名とウマ名の両方で呼ばれて一瞬混乱した。

「こうして一緒にいると、ドーベルさんってなんだか普通の同級生って感じだね。ずっとレースとかライブ中継とかをテレビで観てただけで、その時のドーベルさんはなんか

堂々としてて、本当に女王様って感じだったから、ちよつと意外かも」

「堂々として見えたんだね……。実はいつも結構ブルブル震えてたの」

「そうだったんだー」

香澄ちゃんが目を輝かせてドーベルちゃんを見つめていた。

「でも、あの人が客席にいる時は安心して力を出せたな……」

また、ドーベルちゃんが遠くを見た。

「『あの人』って、引退式の時に話で紹介してた人のこと？」

「うん。引退式の中継を観てくれたならその時に言った通りなんだけど、もう会えないんだ」

「そうなの……」

なんだかしみりとした空気になってしまった。話題をうまく前に進めようと頭を巡らせているうちに、ドーベルちゃんがみずから動いてくれた。

「まあ、あんまり落ち込んでぼーとしてたら『あの人』に怒られそうだから、今日のしみりモードはこれくらいにしなきゃね。午後は学内施設見学だったつけ？」

「うん。なんか理学部とか工学部とか、この先の学生生活だと行かないような建物も一通

り見て回るみたい」

「へえ、面白そう！」

気がついたらあと十分で集合時間だった。そろそろ行かなきゃ。ドーベルちゃん、香澄ちゃんを引き連れるように先頭に立って集合場所になっている講義室に向かった。特にドーベルちゃんはきちんと手を引いて先導した。

ドーベルちゃんが、ここではないどこかへ行ってしまうないように。

(『Trial #143 after: Side Mejiro Dober』第四章へ続く)

あとがき

お久しぶりです。麦（穀物P）です。

この作品『Trial#143 after: Side Mejino Dober』は、二〇二三年（令和五年）三月から五月にかけての二か月間で一気呵成に書き上げ、pixiv に連載して本にもした長編『Trial#143 —空位の騎士—』の後日譚となっております。この巻は前作第十二章と最終章の間の話の一卷目となります。

今回はドーベルさんの最後のレース・二度目のエリザベス女王杯の後から引退式までを描きました。ちなみに有馬記念の日に中山で引退式をしたというのは完全なる創作です。モチーフ元のお馬さんの引退式は、エリザベス女王杯連覇の翌週（一九九九年（平成十一年）十一月二十一日）という、極めて早いタイミングで東京競馬場で開かれました。これ

はメジロドーベルさんの現役時代に厩務員（二代目）を務められた安瀬さんの体調を気遣ったことであつたそうです。なお、今回の引退式シーンの前にあつた有馬記念には、史実でもメジロブライトさんのほか、名前を挙げたウマ娘でも黄金世代としておなじみのお馬さん達が出走しました。結果も本文中の通りです。（その他、七着にナリタトップロードさん、十着にはつい先日開かれた6th EVENTのDAY2でウマ娘化が発表されて、自分含むファンが絶叫して歓迎したステイゴールドさんがいます。）

序章、および間章の語り手であるウマ娘「アクアマリンエール」（ヒト名・野口沙織）は、モチーフ元となつたお馬さんがいない完全オリジナルです。名前を付けるにあたつてnetkeibaのデータベースを調査して、過去に同名のお馬さんがいないことを確認してつけたという裏話があります。話を進める上で現状特に意味を持ちませんが、青毛、そして透き通る淡い青色の耳飾りが左耳についているという設定です。

以下、『Trial #143』シリーズについてくつちやべる蛇足です。

自分の創作歴は二十年近く前の高校時代、一次創作（いわゆる完全オリジナル）から始まりますが、『Trial #143』以前に中長編でひとつの話を完結させられたのは一本だけで、

大部分は執筆中、もしくは執筆中断状態となっています。創作活動そのものも途中で長く中断しており、それを再開したのが二〇二〇年（令和二年）五月、『ご注文はうさぎですか？』の二次創作小説でした。そちらもコミケ合わせで話を書き続けていますが、まだ完結はしていません。『ウマ娘プリティーダービー』にも活動範囲を広げて書いた、先の『Trial#143』が初めて完結まで持つていくことができた長編です。

この後日譚も、本編完結から半年後に少し書いて以降、一年半にわたり執筆が中断していました。その間は別のウマ娘達（およびモチーフ元のお馬さん達）にスポットライトを当てた別の作品を書いていました。二〇二五年（令和七年）、昨年は参加表明するも急病のため参加できなかった『Historie's Mejiro Stakes（メジステ）』の第2Rが今年も開かれるとのことで、それに合わせる形でメジロ家のウマ娘・メジロドーベルさんがメインとなるこの話の執筆を再開しました。今回は発表済分のうち二章、新規一章で一巻を構成しています。

自分のウマ娘系小説では、他のウマ娘やカップリング（ジェンティルドンナさん&ヴィルシーナさん、およびヒシミラクルさん&男性トレーナー）の話が当方従来比予想外の

ヒットになるなどしていますが、書く方向性が定まっっていて、何があっても完結まで持っていきたいというのは、どちらかと言えばこちらの系統の、平行世界的な要素を含む長編だったります。とはいえ、途中で放り出したりはせず、あらゆる話は完結まで持っています。どうぞご期待ください。

今後とも引き続き、『ご注文はうさぎですか?』と『ウマ娘プリティーダービー』の両方の作品の二次創作小説を書いていきたいと思っています。どうぞよろしく願います。

麦（穀物P）

Trial #143 after: Side Mejiro Dober Vol.1

あなたがいない世界で、一步、踏み出して

著者 .. 麦（穀物P）

発行元 .. 麦之穂

サイト .. <https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先 .. circle_muginoho@aotake91.net

発行日 .. 二〇二五年（令和七年） 六月二十九日（初版）

印刷所 .. ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokotto.jp/>)

初回頒布 .. 二〇二五年（令和七年） 六月二十九日

「Historie's Mejiro Stakes 2R」（メヅステ2R）